會津八一の世界

富川

會津八一の世界

宮川寅雄

文一総合出版

著者紹介（みやがわ・とらお）
1908年、東京に生まる。早稲田大学政経学部中退。
1927年以降、会津八一に師事。
現在、和光大学教授。
主要著書 「岡倉天心」「近代美術とその思想」「近代美術の軌跡」「会津八一」「会津八一の文学」「中国美術紀行」「霧光」「中国美術の流れ」（図説「中国の歴史」第12巻）、その他。

会津八一の世界

昭和53年9月5日　初版第1刷発行

著　者　宮川　寅雄
発行者　佐藤　弘一
発行所　株式会社文一総合出版　東京都千代田区神田神保町1-32
電話東京(291)8049　振替東京2-42149

©1978
1095-30009-7354　印刷・製本　奥村印刷
定価は、函・帯に表示してあります。

目次

第一章　歌人と風土

南都の秋艸道人　一〇
八一の子規体験　二〇
いかるがの歌　二四
奈良を歌わない八一　三二
八一と信濃　三六
歌の仮名書き　四一
秋艸堂記　四四
幻夢　四八
奇遇　五二

第二章　学芸と交友

会津八一の中国学　四四
俑研究の昨今　四四
狩谷棭斎のこと　六七
斎藤茂吉との往復書簡　七一
八一の一茶研究　八六
中村彝と八一　八九
中村彝覚書　九四
山口剛との交友　一〇八
志賀直哉との疎隔　一二二
妙なテーマで　一二七
奈良美術の紹介者たち　一三〇
ノート「渡辺崋山について」　一三三
会津八一記念館三則　一三七

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

第三章　解題と書後

「秋艸堂学規」について　一三八
「残燈集」稿本解題　一四四
「頂戴物圖録」解説　一五五
「印象」について　一六一
「飲中八仙歌」解題　一七二
「菊のつくり方」に付して　一八〇
「雁来紅書画幅」解題　一八八
「この生を愛す」書後　二〇〇

第四章　周辺と余滴

古万年筆　二一〇
印人・山田正平　二二四
とりとめなく　二二八

安藤更生の「南都逍遙」　三三
「銀座細見」という本　三九
中川一政先生讃　三六
渡辺海旭老師　三九
霊華と林響　四一
楢重の「絵のある葉書」　四三
吉野秀雄について　四六
良寛寸描　五〇
大同雲崗往訪記　五五
朱花書屋珍宝記　六三
わが蒐集　七三
上村占魚　七五
「後塵を拝す」読後　七九
畸人伝の系譜　八二
郭沫若氏のこと　九五

板橋倫行片鱗　二九八
福原麟太郎氏のブラウニング　三〇二
あとがき　三〇五
初出一覧　三〇八

題簽〃　宮川寅雄
裝訂〃　荒田秀也

会津八一の世界

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

第一章　歌人と風土

南都の秋艸道人

会津八一がはじめて奈良を訪れたのは、一九〇八年（明治四十一）のことで、その折の状況は、八一の義弟であり、親友である天壇・桜井政隆宛の書信（「会津八一全集」所収書簡）で知れるとおりである。またそのときのことを八一自身は「初めて奈良地方に遊び、古蹟を巡り美術を賞して感興浅からず、その間に短歌を詠ずること二十首にして帰れり」と、のちに「鹿鳴集」の「後記」に自記している。しかも、その二十首に、しばしば推敲をくわえた事情は、私も「会津八一・青年の日」（「会津八一の文学」）で考証したとおりである。

われ奈良の風光と美術とを酷愛して、其間に徘徊することすでにいく度ぞ。遂に或は骨をここに埋めんとさへおもへり。ここにして詠じたる歌は、吾ながらに心ゆくばかりなり。われ今これを誦すれば、青山たちまち遠く繞り、緑樹甍に迫りて、恍惚として、身はすでに旧都の中に在るが如し。しかもまた、伽藍寂寞、朱柱たまたま傾き、堊壁ときに破れ、寒鼠は梁上に鳴き、香煙は床上に絶ゆるの状を想起して、愴然これを久しうす。おもふに、かくの如き仏国の荒廃は、諸経もいまだ説かざりしところ、この荒廃あるによりて、わが神魂の遠

く此間に奪ひ去らるるか。

この断章は、一九二四年（大正十三）に刊行した第一歌集「南京新唱」の「自序」の一節である。会津八一が、奈良に魅せられ、歌心を育てていったころの往年の感懐は、右の小文に描破されているといっていい。

「会津八一年譜」によると、つぎの奈良旅行は、世良延雄を同伴しての一九一二年（大正元）のことで、初回の往訪時の新潟県中頸城郡板倉村の有恒学舎から、すでに東京の早稲田中学に転勤していた。このとき、八一は三十二歳である。しかも第三次の奈良行は、さらに隔たって、一九二〇年（大正九）末から翌年にかけてということになる。この間、かれが奈良旅行をしていなかったかどうかは、しばらくおくとしても、歌人・会津八一の生成についていえば、少壮からたずさわっていた俳句からの離脱と見あわせて、この程度の歳月を要したろうことは納得がいく。

同じ年の八月「安藤更生、山田正平、吉武正紀らを伴って奈良、飛鳥、室生などに遊ぶ」と「年譜」は記載している。およそこの日付は、安藤更生にとって決定的な事項でもあり、その記憶をふまえての正確な記録であろう。つづいて十月末にふたたび奈良にいたり、はじめて日吉館に泊り、写真家・小川晴暘を知った。この年、会津八一は、内部の衝動にかられるように、十一月には、また奈良を訪れ、ついで九州地方に足をのばし、越年して一月、再度、奈良に入り、さらに引きかえして大分臼杵の石仏群を往訪し、二月中旬にいたって帰京している。この旅は、在職中の早稲田中学において、職務上憤激することがあっての一種の反抗行動でもあった。大正十

唐招提寺金堂裏の会津八一　1943年

年という年の、この熱っぽい奈良への旅をつうじて、美術研究上の観察を重ねるとともに、のちの「南京新唱」に凝るべき奈良の歌を豊かに熟成させるのであった。

八一は一九二二年（大正十一）には、落合村字下落合一二九六番地の市嶋謙吉の別荘・閑松庵に転居し、これを秋艸堂と改めた。ついで翌年三月、奈良美術研究会を創立し、八月には奈良に赴き、小川晴暘を伴い、一週間にわたって室生寺を撮影せしめた。そしてこの成果を、翌年十一月「室生寺大観」として刊行した。八一の最初の著書が、小川晴暘の写真との合著であったことは、留意すべきことであろう。そしてその翌月、つまり、一九二四年十二月には、第一歌集「南京新唱」を、春陽堂から出版したのである。

「南京新唱」は誕生したものの、売れゆきは悪く、長年にわたって在庫し、八一の南都諷詠は、せまい範囲の友人、知己の間にしか知られることがなかった。会津八一・秋艸道人の奈良の歌が、世の評価を得るようになるのには、なお、これから十五、六年の歳月を要し、一九四〇年

（昭和十五）、創元社から「鹿鳴集」を刊行してからのことである。もちろん、それまでの間、雑誌に歌を発表し、また、私家版の小歌集二種などを出版した。

「鹿鳴集」の出版は、六十歳のときであるから、かれの短歌の道は、けわしく、長く、かつ孤独であったということができる。八一の奈良の歌は、この地点で、ほぼ一応の完成をみたが、なお第三歌集「山光集」（一九四四年・養徳社刊）にいたるまで、引きつづいて制作をつづけるが、太平洋戦争後には、奈良に取材した歌は、ほとんど跡を絶つにいたる。そして最後の歌集「寒燈集」（一九四七年、四季書房刊）では、もっぱら新潟という郷土を対象とする歌人ということになる。すでに「南京新唱」の時代から、奈良の歌以外の、日常の吟に多くの秀歌がある。八一を単に南都吟詠の歌人とするものは、この側面を、ともすると見過ごすのであるが、その誤りは説くまでもない。といって、私は八一が奈良古寺古仏の歌によって評価されているのを拒もうとしているのではない。かれの同世代をとってみても、奈良に取材した歌人は数多くある。しかし、かれのように、対象へのふかい洞察を伴って、そこに開顕した独自の表現と勾うような歌格を達成した歌人は、稀有であった。それゆえにこそ、「鹿鳴集」は、とうぜん永世の古典にくわえられているのである。

そこで私は、すこしばかり、奈良における会津八一の風姿にふれてみたい。といっても、一九二八、九年（昭和三、四）の、私が早稲田第二高等学院の学生だったころ、奈良に同伴した折々の恩師の面影と、それからずっと降って、一九四三年（昭和十八）に、大鹿卓とともに同伴した

折の記憶などを綴るほかはないのである。

昭和初年のころの奈良は、現在にくらべると、隔世の感があるように閑静だった。まず、いまは名物の日吉館に泊るのだが、はじめて投宿したときは、まだ現主の田村きよのさんは嫁に来ていなかった。朝はゆっくり宿をでて、高畑から新薬師寺を歩いたり、法華寺界隈や奈良坂道を散歩した。そうした折、はじめて東大寺観音院に上司海雲を訪ねて、抹茶の饗応にあずかったりした。あるときは、赤膚山正柏の窯で、茶碗に書を絵付した。その折の作品、「鹿鳴呦呦」というのが、いまも手許にある。

夕方はよく、現在の近鉄奈良駅ちかくの新温泉に入湯し、帰りにあられ酒を買って、日吉館の二階で、当時は飲めない私を相手に盃を手にする情景がうかんでくる。そうでなければ、奈良の夜の街で、骨董店をひやかしたり、墨屋をのぞいたりした。よく散歩の途中で、微吟された。経文を低く誦するようで、じつは歌を詠んでいるのである。道人自身もいっているように、できかかった歌を舌頭に翻転し、推敲する態なのである。そういうときは、こちらからは話しかけず、黙ってついていくのが、慣わしになっていた。

恩師といっしょに風呂に入ったのは、あの新温泉だけであるが、そこには蒸風呂があって、ならんで坐して汗をたらした。「南京新唱」の歌人は、四十七、八歳の若さだし、大兵だった。私が流す背中は厚く、岩板のようで、洗いがいがあった。

八一は奈良の古道を歩きながら、ゆくさきざきの寺の人々の話をした。たいていは罪のない挿

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com